

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から<sup>36</sup>

西川 友理

## AさんとBさんの「支援」

「これなら私も出来るかも！」と思  
い立ち、自宅を開放して「子ども食堂」  
を始めたAさんという女性がいました。  
月1回開催、ポスターをつくって、部屋  
に専用スペースを確保して、ご飯もたく  
さん作って…しかし当日集まったのは、  
普段の茶飲み友達、そして自分の娘と孫  
2人。

「ま、最初だしね。」  
などと言っていましたが、翌月も、また  
その翌月もなかなか地域の子どもはや  
って来ず…。

「なんか…つまらないな。」

Aさんはこの月一回の子ども食堂を  
半年もたたずにやめてしまったとの事  
です。

ある市民講座で、福祉の地域活動に  
関する講師をさせていただいた時のこ  
とでした。講義後、受講されていた方の  
1人であるBさんが私に質問に来てく  
ださいました。

「あの、私、貧困の子たちを助けたいん  
ですけど、そういう団体ってどうやっ  
たら始められますか？」

と勢い込んで私に問うBさん。

「貧困の子たち…って、例えばどんな？」

「子どもの貧困って話題になってるじゃないですか。私、そういう子たちを助けたらいいって思って。」

と、畳み込むようにおっしゃいます。

「そうなんですね。今、子どもの貧困についての活動は何かしていらっしゃるんですか？」

「いえ、今はまだやっていないんですけど、そういう団体を自分でやりたいって思ってます…」

### イメージに対する支援

2人とも、困っている子どもに支援したい、という熱い気持ちをお持ちでした。しかし2人とも、なんだかその気持ちが空回りしているような印象を受けました。

そもそも、彼女たちは、だれを見て、「支援をしたい！」と思ったのでしょうか。私は何となく、この2人の身の回りに、具体的な“困っている子ども”は、いなかったのではないかと思うのです。テレビや新聞で「子どもの貧困が問題になっている」という事を見聞きして、感情が動かされ、思わず動いてしまった、あるいは動こうとしたのだらうなと思います。

いわば彼女たちが支援しようとしたのは、「イメージの中の子ども」あるいは「メディアに編集され、“貧困状態にある”と名付けられた子どもイメージ」なのではないでしょうか。あるいは、子どもを支援したい、というより、“支援

活動をする私”になりたいという思いだったのかもしれませんが。地域にはどのような子どもがいるのか、確認をせずに動いてしまうと、実態がともなわず、まともな活動につながりません。

### CさんとDさんの「支援」

とある大きな社会福祉法人の生活施設にお勤めの相談員であるCさんとは、社会福祉士の相談援助実習をお願いした先の実習指導担当者として出会いました。

「Cさんは大変有能な相談援助をする人だ」と、所属組織の中でも評判の高い方の方でした。なるほど確かに、実習の手続きについても、何から何まで話が早く、プログラムも日本社会福祉士会作成のテキストにあるモデルプログラムに基づいて、綿密に練られています。穏やかな雰囲気、すばらしく効率的に段取りを進めてくださいます。

しかし私には、何か違和感がありました。Cさんとの会話が、なんとなく成り立たないのです。

「様々なことが、スムーズに進んでいる。今の所、大きな問題もない。でも…これでいいのかな？ どうして私、こんなふうを感じるんだろう…？」

実習巡回訪問時、Bさん自らが利用者家族様との相談場面で気を付けていらっしゃるということについて、私と学生に話をしてくださったことがありました。Bさんはおっしゃいました。

「…家族面接の前に、当然、ケースの概要は把握しておきます。まず、落としど

ころを決めて、家族面接に挑むんです。そしてその事前に決めた落としどころに持っていけるように、面接を進めるんです。サービス提供のためには、そういう段取りや順序を想定しておくことが大事だと思います。」

そう言われて、今まで感じていた違和感の正体に気付きました。

「あ、そうか。この人、私の話を聞いてないんだ。」と。

「利用者さん家族に対して、あらかじめ“支援の段取り”を考え“落としどころ”を設定し、その支援を実施するための面接をしていच्छるるように、自分の立てた“実習の段取り”や“実習の落としどころ”に基づいて、私や実習生に対して動いていच्छるんだ。」

「…いや、悪い事じゃないんだよな。いわゆる“支援の見通しを立てる”ってことなんだろうな。」

「実際に、実習契約上の利害は一致しているし、指導の方向性も養成校と同じだし、システムは滞りなくすすんでいるし、実習プログラムもきめ細かく順調だし…。」

「…だけど、なんだか、なんというか…。」

何とも言えない気持ちになりました。そしてどうやら、実習生も同じような印象を持っていたようです。

「Cさんって、色々とお話をさせていただけるし、いいこと教えてください、実習も順調やけど…なんか、私の知りたい、学びたい事っていうより、法人の教えた事を聞かされているって感じかなあ…。いや、それらは学ばなきゃいけない事だっていうことは、解っているんです

けど…。」

保育士養成校の学生達は、実習に行く前に、子どもの発達過程について学びます。つまり、「大体〇歳ならこれくらいが出来る」「〇歳児にはまだこれは難しい」といったことを覚えます。

それらを覚え、実習に出、そして帰ってきた学生達。

「私の行った実習先の園の子ら、まだ2歳なのにクラス全員××が出来ててんよ」

「すごいなあ、私が行った△△保育園の子たちなんか、4歳になっても◇◇が出来てなかったよ」

などと、わあわあ話しています。

基準になっているのは、教科書で覚えた“子どもの発達過程”の一覧です。その発言が気になって、私は口を挟みません。

「その、何歳でこれが出来る、あれが出来る、ってあるでしょ？それってどの子と比較してるの？」

「え、どの子って…？。」

「その“発達過程”の表に載っている子ってさ、まぼろしやん。その子、どこにもおらへん子やん。」

曇みかける私の発言に、不満そうな学生Dさんが、意見をくれます

「…比較しても意味ないってことですか？でも、だって先生ら、この教科書、教えてたやん。これ覚えろって言うてたやん。」

「うん、確かに言うた。言うたけどさ、そういう事やないねん。」

## モデルに基づいた支援

Cさんは、「実習プログラムのモデル」を遂行しようとしてしました。Dさんをはじめとした保育学生たちは「〇歳児のモデル」を参考にしました。これらのモデルはイメージではなく、きちんとした根拠があるモデルです。しかし、その「モデル」もまた、「標準的なマニュアル」「平均的な値」を表したものであり、架空の“標準的な”実習生に向けたもの、架空の“平均的な”子どもの姿なのです。そのようなモデルをもとに支援を組み立てると、その場にいる多くの人に無難に使える支援計画になるかもしれませんが、決してその人のための支援計画にはなりません。

## 知るべき相手は目の前の人

あらゆる支援は、こちらが具体的に相手に働きかける前に、まず「相手をよく見る」ことから始まるように思います。さらには、支援は、なんらかの支援を単に目の前の相手に渡す事ではなく、相手と私の関係性の中で構築される関係性の中で行われるやり取りに基づくものだと思うのです。そのためにも、まずは目の前の相手をよく見る、という事から外れてはいけないと思っています。

「よく見ることから外れる」とはどういうことでしょうか。

それは、実際に、目の前にいる〇〇さんよりも、「これはこういうもの」「これが正しいとされている」「セオリーではこれ」「平均値はここ」というイメー

ジ、モデル、多数派、有力説、データの平均を基準に、目の前のケースを見てしまう事です。頭でっかちになりすぎて、相手に対する視野が小さくなってしまおうという事です。

## イメージやモデルは不要、 というわけではない。

ただし、イメージやモデルなどに、意味がないということではありません。

ある状況にいる人に対するイメージは、ステレオタイプなモノの見方だからと切り捨ててしまうことも出来ませんが、世間の一般的な目から見た「普通感覚」に近いものです。目の前の利用者とその人の関係する様々な人(支援者も含めて)の状況に、世間一般にあるイメージは大変大きな影響を与えます。対人援助について学び、理解を深め、経験を重ねるほど、対象に対する理解、特に世間からマイノリティとされている人に対する理解は、世間一般に浸透しているイメージから乖離してしまいます。むしろ世間一般ではどのようなものと受け止められるのか、「普通感覚」としての偏ったイメージを意識する必要があります。

支援のモデルはさらに重要です。子どもの発達過程のモデルや、ある支援システムのモデルプログラムは、単なるマニュアルであるとも言えますが、その背景には大量のデータによって算出され、膨大な経験によって導き出された「理論」があり、「集合知」があります。モデルに基づく支援システムの運用は、根

拠が明確で、多くのケースにおいて大変有効なものです。

そもそも福祉サービスは、国のシステムや制度に基づいて運営されているものが多いですから、目の前の利用者がどういう状況であっても、「モデル」に基づいて作られた一定のルールや、基準などに基づいて支援は展開されます。対人援助職が、これらのルールや基準を知らなかったり、意味を理解していなかったりという事では、支援も何もあったものではありません。

この社会において福祉サービスを実施していくためには、イメージやモデル、つまり“普通はこうだろう”という感覚と知識を持っておくことがやはり必要だと思います。

### **知識や経験を大切にしつつ、 目の前の人に対峙する**

それらの普通の感覚と知識を頭に入れた上で、それでもなお、実際に“ある人”を目の前にした時に、思考に枠組みを設けず、ただただ素直にその人の思いや考えを尊重し、注意深くその人を知ろうとすること、知っている事や理解している枠組みと今までの経験をいったん横に置き、その人自身と向き合うこと。

そして、いざ具体的な支援を考える時には、中心にその人の思いや考えを据えた上で、既存の枠組みである「普通の感覚」や制度、知識の枠組み、経験則とどう組み合わせていくのかを考える。

これを私は、「システムは明確に、運用は柔軟に」とよく表現します。そん

なバランス感覚を持って、利用者とのやりとりの中で支援が展開していく事が大切だと思うのです。

そしてこのような個別のケースへの積み重ねから、また新たな支援のモデルが生まれていきます。

### **養成校にできる事**

となると、福祉系対人援助職養成校が学生に出来ることはなんでしょう。

「イメージ」は世の中にあふれていますから、まずは感情的にそれらに振り回され過ぎないように、法制度、システム、理念、データといった、いわゆる福祉の「モデル」を学生に伝えます。

これと同時に、実際に様々な場所に出向き、人に出会い、「よく見る」体験を積み重ねることで、その場で自分がどう考え、どう動くのかを問われるような経験をする機会を学生に提供します。

そしてそれらすべてについて、振り返ることが出来る時間的余裕や機会、経験を語り合える場などが必要だと思います。

多分、それらを展開する場が授業であり、実習であるのだと思います。

…色々考えてみましたが、結論はけっこう普通です。普通というか、王道です。

でも、「何を大事にしているから、こんなことしているのだっけ」という事から、軸足を外さないことが大事だと思っています。普通の事を普通に行う中で、「システムの明確さ、モデルの大切さ、

ただ目の前の人に向き合い、よく見る事」をうっかり忘れてしまわないようにする、といったことに気を付けたいのです。

### もうすぐやってくる新入生

「保育園の先生になりたいんです。子どものボランティアとか、したことないけど…でも、子どもって可愛いから。」

保育者のイメージや子どものイメージに惹かれて、4月にはまた、学生達が入学してきます。

授業の中で様々な制度、システム、モデルに出会い、また実際に現場でよく見て、向き合う経験をし、それらについてじっくり考える中で、彼らはどんな支援を作り上げていくのでしょうか。

明確なモデルとなる支援システムが存在しているからこそ、それを運用する際に、その人らしい支援が生まれるのだなあと思います。

ある程度実習を経験した学生に、支援計画を立てる宿題を出すと、同じモデルを教えているのに、それぞれが違うカラーの支援を作り上げてきます。それを基に授業中に話し合う中で、学生同士はもちろん、私も新たな視点を得ます。様々な視点の存在を知ると、ケースを多面的に理解出来るようになり、チーム支援をする大切さ、連携や協働の意味も自然に身につきます。面白いなあと思います。